経済学の父アダム・スミスの人生哲学：『道徳情操論』を読む（中）

関西外国語大学教授・放送大学客員教授・神戸大学名誉教授
滝川好夫

目次

＜論文・上：項目１～１１６＞
第１部　行為の道徳的適正
第１編　道徳的適正感
　第１章　同情
　第２章　互いに同情し合うことによる快感
　第３章　性向の一致・不一致による、性向の道徳的適正・不適正の判断
　第４章　同じ問題の続き
　第５章　愛すべき・尊敬すべき美徳
第２編　道徳的適正に矛盾しない情感の程度
　第１章　身体に起源を持つ情感
　第２章　想像力の特殊の方向または習慣に起源を持つ情感
　第３章　非社会的情操
　第４章　社会的情操
　第５章　利己的情感
第３編　行為の道徳的適正に関する人々の判断に及ぼす繁栄・逆境の影響
　第１章　「悲しみ vs. 喜び」の当事者・他人の感覚作用
　第２章　野心の起源ならびに身分の区別
　第３章　「富者・偉人の賛美 vs. 貧困者・下賤者の軽蔑・無視」による道徳情操の頽廃

第２部　功績・罪過あるいは褒賞・処罰の対象
第１編　功績・罪過の感覚
　序論
　第１章　「感謝の対象は褒賞に価い vs. 報復感の対象は処罰に価い」という考え方
　第２章　感謝・報復感の対象
　第３章　恩恵を施す人の行為の是認と恩恵を受ける人の抱く感謝の気持ちに対する同情 vs. 危害を加えた人の動機の否認と危害のために苦しむ人の報復感に対する同情
　第４章　前述各章の総括
　第５章　功績・罪過の感覚
第２篇　正義と仁恵
　第１章　正義と仁恵の比較
　第２章　正義・悔恨の感覚ならびに功績の意識
　第３章　自然の摂理の効用

＜論文・中：項目１１７～１８８＞
第３篇　行為の功績・罪過に関して情操に及ぼす運の影響
　序論
　第１章　運がもたらす影響の諸原因
　第２章　運の与える影響の範囲
　第３章　情操の不規則性の起こる究極の原因

第３部　情操・行為に関する判断の基礎ならびに義務の感覚
　第１章　自己是認・自己否認の原理
　第２章　称讃・称讃に価いすることを愛し、非難・非難に価いすることを恐れる
　第３章　良心の作用と権威
　第４章　自己欺瞞の性質、一般原則の起源と利用
　第５章　道徳の一般原則の作用と権威、神の戒律とみなされることの正しさ
　第６章　義務の感覚：行為の唯一の原理 vs, 他の諸動機との作用

＜論文・下：項目１８９～３２９＞
第４部　是認の情操に及ぼす効用性の影響
　第１章　効用性の芸術作品に与える美、および美の及ぼす広範なる影響
　第２章　性格・行為に賦与される美の知覚と是認の根本原理

第５部　是認・否認の情操に及ぼす慣習・流行の影響
　第１章　美・醜に関する観念に及ぼす慣習・流行の影響
　第２章　道徳情操に及ぼす慣習・流行の影響

第６部　有徳の性格

第１編　幸福だけに作用を及ぼす個人の性格、慎慮
第２編　幸福だけに影響を及ぼすことの出来る個人の性格
　序論
　第１章　自然が個人を我々の配慮・注意に委ねる順序
　第２章　自然が社会を我々の仁恵に委ねる順序
　第３章　普遍的仁愛
第３編　自己統制

第６部の結論

　本論文は、「経済学の父」と呼ばれているアダム・スミスによって、１７５９年に出版された『道徳情操論（上・下）』にもとづいた「ビジネス倫理」「人生哲学」「生活

指針」の論文である。

アダム・スミスと言えば、１７７６年に刊行された『国富論（諸国民の富の性質と原因に関する研究）』が有名である。学部時代にはさまざまな経済学古典書を読んだものであるが、より正確に言うならば、読んだ気になったものであるが、経済学研究者・教育者になってから、つねにひっかかかっているのは、それぞれの経済学に出てくる「人間」である。

経済学では「合理的人間」と呼ばれる人間が出てくるのであるが、いつも「合理的人間」とはどういう人間であるのかが気になっていた。あるいは、経済学にはロボット人間しかいないのではと思うこともあった。アダム・スミスと言えば、「見えざる手」が有名であり、それは人々が好き勝手にしていても、経済は市場メカニズム（価格メカニズム）によりうまく運営されるというものであるが、「見えざる手」は本当に好き勝手に行動している人間を想定しているのであろうかと疑問を抱いていた。

そこで、「経済学の父」と呼ばれているアダム・スミスの人間観を知りたいと思い、読み始めたのが上・下で合計７５２ページあるアダム・スミス『道徳情操論』（米林富男訳、未来社、１９６９年１０月）である。同書は Adam Smith, The Theory of Moral Sentiments, 1759 の翻訳であるが、訳書には、第１に第６版１７９０年、第２に副題「人々がまずもって隣人の行為と性格に関して、ついで自分自身の行為と性格に関して自然に判断を下す場合における諸原理の分析を目的とする一試論」、第３にグラスゴウ大学道徳哲学教授　法学博士　アダム・スミス著と書かれている。

アダム・スミス『道徳情操論』を１度、２度、３度と繰り返し読んでいると、私の人生を回顧させられ、また日々の生活を反省させられる記述が多々あり、これほど「腑に落ちた」本を読んだのははじめてである。これはもはや経済学の、あるいは経済学に出てくる人間を知ろうとして読む本ではなく、「ビジネス倫理」「人生哲学」「生活指針」の本であると強く確信するようになった。

本論文は、偉大なアダム・スミスの、名著『道徳情操論』の内容を、同書の目次構成のまま（ただし、「第７部　道徳哲学の諸学説について」「附録　言語起源論」は割愛）、３２９の項目を作成して紹介するものであり、「ビジネス倫理」「人生哲学」「生活指針」の本として読むとき「腑に落ちる」ことばかりであると期待している。本論文が「ビジネス見直し」「人生見直し」「生活見直し」に役立つことを願っている。『道徳情操論』のすばらしさ、しかも「ビジネス倫理本」「人生哲学本」「生活指針本」としてのすばらしさを知ってもらいたいと思い、本論文執筆を企図した。

第３篇　行為の功績または罪過に関して人類の情操に及ぼす偶然の運の影響について

序論

１１７　「行為を生ぜしめた心の意図または性向」のみが称賛・非難の基礎になりえる。

「身体の外部的な行為または運動」「実際上の結果の良い・悪い」の２つはいかなる称賛・非難の基礎にはなりえず、「行為を生ぜしめた心の意図または性向」のみが称

賛・非難の基礎になりえる。

１１８　行為を起こさせた意図・性向が同様であれば、行為の功績または罪過は同一である。
　行為の実際の結果（偶然の結果、意図されない結果、予期しない結果）がいかに異なっていても、行為を起こさせた意図・性向が同様であれば、行為の功績または罪過は同一である。

第１章　運がもたらすこのような影響の諸原因について

１１９　新しい恩恵を無理矢理に獲得しようとする感謝は「感謝の押売」と呼ばれる。
　快楽の諸原因は感謝という情感を直接刺戟する。我々が恩恵を施してくれた人に対して感謝をするのは、我々が恩恵を施すだけの価値のある人であったことに対して喜びを感じさせたいからである。恩恵を施してくれた人から新しい恩恵を無理矢理に獲得しようとする感謝は「感謝の押売」と呼ばれ、軽蔑される。

１２０　我々が危害を加えられた人に対して報復したいのは、我々が危害を加えられるような人でなかったことを後悔させたいからである
　苦痛の諸原因は報復感という情感を直接刺戟する。我々が危害を加えられた人に対して報復したいのは、第１に我々の敵をして逆に苦痛を感じさせたい、第２に我々が危害を加えられるような人でなかったことを後悔させたいからである。

１２１　我々は傷つけられ、辱しめられれば怒る。
　我々を怒らせるものは、我々を傷つけ、辱しめる人の「我々に対する軽蔑の態度」「その人自身を我々よりも大切であると思っている不合理な態度」「その人の便宜とか気儘とかのために我々をいつでも犠牲にしても構わないと考えている利己心」の３つである。

第２章　運の与えるこのような影響の範囲について

１２２　「運」の良い・悪いにより、行為の功績または罪過に関する感覚を増大させる。
　行為を引き起こした心の意図・性向がいかに最も称讃すべき、あるいは最も非難すべきであったとしても、行為が「運」のために自らの予期した効果を収めることができなかった場合、行為の功績または罪過に関する感覚を減退させる。行為が「運」により異常の快楽または苦痛を起こさせた場合、行為を引き起こした意図・性向に相当する程度以上に、行為の功績または罪過に関する感覚を増大させる。

１２３　意図の適正・不適正のいかんにかかわらず、意図する結果を実現することに失敗したとすれば功績・罪過は大したものでない。

意図が非常に適正であり仁恵的であるとしても、行為の結果が意図する結果を実現することに失敗したとすれば、功績は大したものでない。意図が非常に不適正であり悪意に満ちたものであるとしても、行為の結果が意図する結果を実現することに失敗したとすれば、罪過は大したものでない。

１２４　世話をしようとして失敗した人は友人とみなされ、成功した人は恩人とみなされる。

一般には、我々は、世話の成功・不成功のいかんにかかわらず、世話をしようとした人には義理を感じるものであると言われている。世話をしようとして失敗した人は世話をしてもらった人の友人とみなされ、その人から愛情を受ける資格があるが、世話をしようとして成功した人は世話をしてもらった人の恩人とみなされ、その人から尊敬・感謝を受ける資格がある。

１２５　悪事を未遂に終わった人の罪過は完遂した人の罪過より大したものでない。

意図が悪意に満ちたものであるとしても、悪事を未遂に終わった人の罪過は悪事を完遂した人の罪過より大したものでない。

１２６　悪い情報の伝達者は不愉快な存在であり、良い情報の伝達者は愉快な存在である。

伝達者が単に我々に説明したにすぎない出来事を、我々は伝達者が実際に実現したかのようにとらえる。悪い情報の伝達者は不愉快な存在であり、一瞬間、悪運の創作者とみなされ、一時的な報復感の対象となる。良い情報の伝達者は愉快な存在であり、一瞬間、幸運の創作者とみなされ、一時的な感謝の対象となる。

１２７　著しい怠慢は悪意のある計画にほとんど等しい。

何らの損害も与えないけれども、何らかの懲罰に価いする程度の「怠慢」は存在する。不注意から何らかの不幸な結果が起こった場合、責任のある人は、あたかも、その人がこのような結果をもたらすように現実に意図していたかのように罰せられることがある。

第３章　このような情操の不規則性の起こる究極の原因について

第３部　自分自身の情操と行為に関するわれわれの判断の基礎について、ならびに義務の感覚について

第１章　自己是認と自己否認の原理について

１２８　他人の行為を支配した情操に同情できるならば他人の行為を是認し、同情できなければ否認する。

我々は、他人の事情を充分熟知したうえで、他人の行為を支配した情操に同情できる

ならば他人の行為を是認し、他人の行為を支配した情操に同情できなければ他人の行為を否認する。

１２９　我々は自己の情操・行為を他人の眼を借りて眺める。
　スミスは、「われわれが自分自身の行為を是認したり、否認したりするのは、われわれが自分の立場を他人の立場に置き換えて、他人の眼をもってまた他人の立場から自分の行為を眺めるとき、われわれが自分の行為を支配した情操や動機に全面的に移入し、同情できるか、どうかということによって決定せられる。」（訳書 p.253）と述べている。つまり、我々は自己の情操・行為を他人の眼を借りて眺めなければならない。

１３０　情操・行為の道徳的適正・不適正の判断は、自己を社会の中に置き、他人の眼にどのように映るかを想像することから始まる。
　孤立した生活をしていれば、自己の容姿の美醜を判断できず、容姿の美醜の判断は、自己を社会の中に置き、他人の容姿・容貌と比べることから始まる。同様に、孤立した生活をしていれば、自己の情操・行為の道徳的適正・不適正（「心の美醜」）を判断できず、情操・行為の道徳的適正・不適正の判断は、自己を社会の中に置き、他人の眼にどのように映るかを想像することから始まる。

第２章　称讃または称讃に価いすることを愛し、非難または非難に価いすることを恐れることについて

１３１　人は「愛されたい」「愛すべきものになりたい」と欲し、「憎まれる」「憎むべきものになる」ことを恐れる。
　人は「愛されたい」「愛すべきものになりたい」「愛の自然にして適切なる対象になりたい」と欲する。また、人は「憎まれる」「憎むべきものになる」「憎悪の自然にして適切なる対象になる」ことを恐れる。

１３２　人は「称讃される」「称讃に価いする」ことを欲し、「非難される」「非難に価いする」ことを恐れる。
　人は「称讃される」「称讃に価いする」ことを欲する。また、人は「非難される」「非難に価いする」ことを恐れる。「称讃される」・「非難される」は、他人が我々の性格・行為に関して現実にいかなる情操を抱いているかということを表し、「称讃に価いする」・「非難に価いする」は、他人が我々の性格・行為に関していかなる情操を抱かねばならないかということを表している。感受性の鋭い人は、正しい称讃を受けて良い気分になるよりも、正しい非難を受けて悪い気分になる傾向のほうがはるかに著しい。賢明な人は、不相応な称讃を軽蔑して退けるが、不相応な非難を受けた場合はきわめて厳しく不正を感じる。

１３３　「競争心」は他人の優越性を感嘆することから始まる。

我々が情操・行為を是認する人々に対して自然に感じる愛情・感嘆は必然的に我々をして、同様の快的な情操の対象になりたいと欲する気持ちを抱かせる。我々が抜きん出たいという熱心な願望、すなわち「競争心」は、他人の優越性を感嘆することから始まる。

１３４　称讃に価いすることを承知している事柄を行う場合に、たとえ何らの称讃を与えられないとしても、喜びを感じる。

我々は称讃に対して喜びを感ずるばかりでなく、称讃に価いすることを行ったということに対して喜びを感ずる。称讃に価いすることを証拠立てるものがあるときは、たとえ何らの称讃を実際に受けなくとも、我々が自分自身を称讃の自然の対象になしたと考えることは、我々にとって嬉しいことである。スミスは、これに関して、「かれ（賢明な人－引用者注）は自分自身の行為があらゆる点において完全に道徳的に適正であることに関して、最も完全な確信をもつ場合でなければ、そのような栄誉を得たいという気持ちには決してならない。この場合、かれの自己是認は他の人々の是認によって確認される必要を毫も認めない。かれの自己是認はそれだけで十分であり、かれはそれに満足する。」（訳書 pp.271-272）と述べている。

１３５　称讃に価いすることを証拠立てるものがない場合に称讃されても、ほとんど喜びを感じない。

称讃に価いすることを証拠立てるものがないにもかかわらず、我々は無智・錯覚から称讃されることがある。称讃の根拠がないときには、真心をもって称讃されたとしても、決して喜ぶことができない。根拠のない讃辞に喜ぶのは、最も皮相な軽薄さ、ないし弱さの証拠であり、最も笑うべきまた最も軽蔑すべき諸々の悪徳の根源である。

１３６　非難に価いすることを証拠立てるものがあるときは、何らの非難を実際に受けなくとも、我々を苦しめる。

非難に価いすることを証拠立てるものがあるときは、たとえ何らの非難を実際に受けなくとも、我々が自分自身を非難に価いしたと反省することは、我々にとって苦しいことである。

１３７　我々が恐れるのは「軽蔑される」ことよりも、「軽蔑すべきものになる」ことである。

我々が恐れるのは、憎まれること、軽蔑されることよりも、むしろ憎むべきもの、軽蔑すべきものになることである。

１３８　名声を死後に得るために生命を投げ出すことがある。

人々は名声を死後に得るために、進んでその生命を投げ捨てることがある。というのは、人々は、想像力を働かせることによって、未来において与えらるべき栄誉を予期しているからである。

１３９　「是認されなければならない」は美徳に対する真の愛情を鼓吹し、悪徳に対する真の嫌悪を吹き込む。

人は、「是認されたい」という欲望ばかりでなく、「是認されなければならないものになりたい」という欲望を有している。「是認されなければならない」といった欲望は、第１に真に社会に適応したいと切望するために、第２に美徳に対する真の愛情を鼓吹し、悪徳に対する真の嫌悪を吹き込むために、必要欠くべからざるものである。教養の豊かな人の心の中には、これら２種類の欲望の中でも「是認されなければならない」欲望がより強い。

１４０　不相応な非難は非常にきびしく苦しめられる。

不相応な非難は、人並み以上の精神力をもつ人々でさえも、非常にきびしく苦しめられる。たとえ我々が自分自身の潔白を完全に意識していても、汚名を着せられること自体が、我々自身の想像のうちにおいてさえ、不名誉の陰影を投げかけられるのである。

１４１　宗教だけが来世の思想を提供することができる。

不幸な境遇にある人々にとっては、現世だけにその考察を局限しようとする下等な哲学はほとんどなんらの慰安をも与えることはできない。来世は現世に比較してはるかに公平無私であり、はるかに人間愛にあふれ、またはるかに正義に満ちた世界である。宗教だけが来世の思想を提供することができ、不幸な境遇にある人々に何らかの効果的な慰安を与えることができる。

１４２　数学者・自然哲学者は与論に支配されないが、詩人・文芸家は一種の文学的派閥に分裂する傾向がある。

数学者・自然哲学者はまったく与論に支配されないが、詩人・文芸家はきわめて容易に一種の文学的派閥に分裂する傾向がある。数学者・自然哲学者は名声を維持する、あるいは競争者の名声を下落させるために、自ら結集して徒党を組んだり、派閥をつくったりする傾向をほとんどもたない。詩人・文芸家は、味方の著作にとって有利に、しかし敵の著作にとって不利に与論を先導するために、あらゆる下劣な手段を用いて権謀術策をめぐらす。

１４３　自らの功績に関して他人の意見を知りたがる理由は自信をもっていないからである。

我々が自らの功績に関して他人の意見をしきりに知りたがる理由は、１つは我々が自らの功績に関して自信をもっていないこと、もう１つは我々が自らの功績を欲目に見ていいほうに解釈したがることである。

１４４　我々の功績を好意的に考えたくない人は「称讃を得たい」欲望のせいにし、好意的に考える人は「称讃に価いする行為を行いたい」欲望のせいにする。

我々の行為の功績を好意的に考えたくない人は、我々の功績を「称讃を得たい」欲望（「虚栄心」）のせいにしようとし、我々の行為の功績を好意的に考える人は、我々の功績を「称讃に価いする行為を行いたい」欲望のせいにしようとする。

１４５　「称讃を求める」「称賛に価いする行為を行う」ことにあせることは弱さを示す徴候であり、「非難を避ける」ことには称讃に価いする用心深さが見られる。
称讃を求めもしくは称讃に価いする行為を行おうとして非常にあせる態度を見せることはある程度の弱さを示す徴候である。非難もしくは悪口の暗影を熱心に避けようとする態度には、何らの弱さも見られないばかりでなく、最も称讃に価いする用心深さが見られる。

１４６　仲間が是認する場合には喜びを感じ、否認する場合には心を傷め、非難攻撃する場合には心を悩まし、称讃する場合には得意になる。
我々の行為を我々の仲間が是認する場合には喜びを感じ、否認する場合には心を傷める。我々の行為を我々の仲間が非難攻撃する場合には心を悩まし、称讃する場合には得意になる。

１４７　自然の創造主は一人ひとりの人間を人類全体の直接の裁判官に作り上げている。
自然の創造主は一人ひとりの人間を人類全体の直接の裁判官に作り上げ、「称讃される」「非難される」に関わる法廷を下級、「称讃されるに価する」「非難に価いする」に関わる法廷を上級とみなしている。

１４８　相反する利害関係を正当に眺めるには、第三者の眼をもって観察しなければならない。
我々が相反する利害関係を正当に眺めるには、我々自身の眼で眺めてはならず、また相手方の眼で眺めてはならないので、どちらに対しても何ら特別の関係をもたない、しかも我々の間の関係を公正に判断する第三者の立場から、またこのような第三者の眼（道徳的適正の感覚ならびに正義の感覚）をもって観察しなければならない

第３章　良心の作用と権威について

１４９　「受動的諸感情」は貪欲で、利己的であり、「能動的諸感情」は寛大で、高貴である。
「受動的諸感情」は貪欲で、利己的である。「能動的諸感情」は寛大で、高貴である。我々の行為を規定するものは能動的諸感情である。

１５０　利己心の衝動を抑制するものは「良心」である。
利己心の衝動を抑制するものは、人間愛、仁愛ではなく、「理性」「原理」「良心」である。良心によって、我々は、第１に自身ならびに自身に関係するすべての事柄が実

際にくだらぬものであるということを学ぶことができる、第２に利己心の自然に陥りやすい誤った考え方を矯正することができる、第３に自身の最大の利益を、もっと大きな他人の利益のために放棄することの道徳的適正、ならびに自身が最大の利益を得るために他人に対して最少限度の危害を与えることの醜悪性を示すことができる。

１５１　すべての安全、すべての平和は神聖な諸規則をどう遵守するかにかかっている。

貧乏人が金持ちから窃盗した場合に、貧乏人にとっての利益の程度が金持ちにとっての損失の程度に比較していかに大きいとしても、人間社会のすべての安全、すべての平和は神聖な諸規則をどう遵守するかにかかっているので、貧乏人は決して金持ちから盗んだりしてはならない。

１５２　過度に親切な愛情は非難すべきものにみえても、決して嫌悪すべきものではない。

過度に親切な愛情（例えば、自分の子供に対する可愛がり過ぎ、自分の両親に対する孝養、未亡人のわざとらしい悲しみなど）は、他人の感情を害しやすいが、たとえ非難すべきものにみえても、決して嫌悪すべきものではない。過度に親切な愛情は、完全に是認されるわけではないが、厳しく咎められるものではない。スミスは、子供については、「われわれは、両親の過度の愛着心ならびに配慮は結局こどもに対して何らかの有害な作用を与えることになるものとして、そしてそのことはやがて両親に対して過度の不便を与えることになるものとして、これを非難する。しかしながら、われわれは容易にそれを許すことができ、そして決してそれを憎むべきもの、嫌うべきものとみなさない。」（訳書 p.310）と述べている。

１５３　普通に見られる過度の愛着心の不足は常に嫌悪すべきものである。

普通に見られる過度の愛着心の不足は常に嫌悪すべきものである。例証として、子供を取り上げると、自分の子供に対して何らの感情を抱かないばかりか、不相応に厳しくかつ手荒に取り扱うようのは嫌悪すべきである。

１５４　生まれたときからの単なる貧乏人と、金持ちから没落した貧乏人は異なる。

生まれたときからの単なる貧乏人、つまり単に幸運に恵まれなかった人は、同憂の念を起こさせない。単なる貧乏について不平を述べても、同類感情の対象となるよりもむしろ嘲笑の対象となる傾向が強い。金持ちから没落した貧乏人、つまり不運に遇った人は、誠実味のこもった同情を起こさせ、大目に見られることによって粗末で平凡ではあるが、しかしある程度の品位を保ちながら生活を維持することができる。

１５５　老いた人は、世間の称讃・非難に対して無視できる心構えができている。

老いた人は、世間の愚昧と不正を長期間にわたって経験し、世間の称讃・非難に対して無視できる心構えができている。無関心は老いた人の確立された性格からくる確固たる自信にもとづくものである。

１５６　若い人は老いた人の無関心ぶりに対して不愉快とみなす。

若い人は確立された性格からくる確固たる自信を持っていないし、持つ必要もないので、老いた人の無関心ぶりに対しては不愉快とみなす。これに関して、スミスは、「われわれは青年が多少の暴力を用いても、かれが自分の性格または名誉を不当に傷つけるような不正な誹謗に対して報復する場合、しばしばその青年を尊敬する。」（訳書 p.313）と述べている。

１５７　幼い子供はびっくりさせられることによって、憤怒を抑制しなければならないことを学ぶ。

幼い子供は何ら自己統制力をもっていない。幼い子供は情感の種類（恐怖、悲哀、憤怒など）のいかんにかかわらず、常にあらん限りの声を絞り出して泣き叫ぶことによって、注意を促そうとする。やむをえず大きな声を立てて、びっくりさせておとなしくするようにさせることによって、幼い子供は情感を抑制しなければならないことを学ぶ。

１５８　子供が学校へ通うようになると、仲間に気にいられることを欲し、仲間から憎まれることを避けようと欲する。

子供が学校へ通うようになると、子供は、仲間の子供たちが何ら自分の両親の示してくれたような寛大な偏愛を示してくれないことに気がつき、仲間に気にいられることを欲し、仲間から憎まれたり軽蔑されたりすることを避けようと欲する。

１５９　大きな家庭的不幸に悩んでいる人は、赤の他人の前では、出来る限り陽気に、かつ気楽に振る舞おうと努力する。

非常に大きな家庭的不幸に悩んでいる人は、第１に、赤の他人の前では、自分らしい態度を維持しようと努力し、出来る限り陽気に、かつ気楽に振る舞おうと努力する、第２に、親しい人の前では、一層寛大な同情を期待し、赤の他人の面前よりは抑制作用を低くする。

１６０　自己統制さえできれば、悲惨・困窮を克服できる。

公平無私なる見物人になりきろうとする自己統制の程度が大きければ大きいほど、悲惨・困窮克服の快感はますます大きくなる。完全な自己満足で満たされている胸中へは、悲惨・困窮は決して入り込むことはできないので、全く不幸でありうる人は一人もいないはずである。

１６１　「平静」と「享楽」の共存が幸福の源泉である。

「平静」と「享楽」の共存が幸福の源泉であり、第１に平静を失っては何らの享楽もありえない、第２に平静を完全に保っているときには、いかなるものからも享楽を得ることができる。

１６２　悲惨・混乱の原因は、貧困、私生活、無名などと、富貴、公的地位、名声などとの間の差異を過大に評価することから生じる。

何の変化も期待しえない状態は「恒常的境遇」と呼ばれ、貧困、私生活、無名などは１つの恒常的境遇であり、富貴、公的地位、名声などはもう１つの恒常的境遇である。スミスは、「真の幸福に関しては一つの恒常的境遇と他の恒常的境遇との間には、何ら本質的な差異はない」（訳書 p.322）と述べている。貪慾は貧困・富貴の差異を、野心は私生活・公的地位の差異を、自負心は世間から埋もれている無名と、津々浦々に拡まる名声との間の差異をそれぞれ過大に評価する。人間生活における悲惨と混乱の原因は、我々が１つの恒常的境遇（貧困、私生活、無名など）ともう１つの恒常的境遇（富貴、公的地位、名声など）との間の差異を過大に評価することから生じる。

１６３　貧困、無名であろうが、最も華やかな状態において得ることのできる快楽を見出すことができる。

我々は、貧困、無名であろうが、永続的な境遇となったものに対しては、遅かれ早かれ確実性をもって自ら適応できるので、虚栄心・優越性といった快楽は別として、最も華やかな状態において得ることのできるあらゆるその他の快楽を見出すことができる。

１６４　心掛けのいい人は、いかなる境遇の下にあっても、平静であり、享楽を得ることができ、幸福である。

心掛けのいい人は、人生における日常のいかなる境遇（たとえば「貧困 vs. 富貴」「私生活 vs. 公的地位」「無名 vs. 名声」）の下にあっても、同様に平静であり、同様に享楽を得ることができ、幸福である。

１６５　他人の諸感情に対する我々の感受性は我々の自己統制を基礎づけている原理である。

他人の諸感情（悲しみ、喜び）に対する我々の感受性は我々の自己統制を基礎づけている原理である。これに関して、スミスは、「われわれの隣人が不幸に陥っているときに、その人の悲しみに同情するようにわれわれを促すのと同じ原理または本能そのものが、自分が不幸に陥っているときに自分の悲しみに対して浅ましい惨めな泣き言を並べることを慎むようにわれわれを促すのである。」あるいは「隣人が繁栄の状態ならびに成功の状態にあるときに、われわれを促してかれの喜びに対して祝辞を述べさせるのと同じ原理または本能が、自分自身が繁昌したり成功したりしたときに、われわれを促して自分の喜びに浮かれる軽卒や不節制を慎むように警しめてくれるのである。」（訳書 p.327）と述べている。つまり、最も完全な美徳をそなえた人は、一方で他人の生得的な諸感情ならびに同情的諸感情に対して最も繊細な感受性を示す人であり、他方で自分自身の生得的な諸感情ならびに同情的諸感情を最も完全に統制する人である。

１６６　自己統制という美徳を護るのに生まれつき適している人は、人間愛という美徳を獲得するにも適している。

他人の生得的な諸感情ならびに同情的諸感情に対して最も繊細な感受性を示すことは「人間愛という優しい美徳」、自分自身の生得的な諸感情ならびに同情的諸感情を最も完全に統制することは「自己統制という厳しい美徳」とそれぞれ呼ばれている。自己統制という美徳を護るのに生まれつき適している人は、人間愛という美徳を獲得するにも適している。

１６７　安楽な境遇にある人は人間愛という優しい美徳をもつことができ、困難な境遇にある人は自己統制という厳しい美徳をもつことができる。

自ら安楽な境遇にある人は人間愛という優しい美徳をもつことができ、自ら困難な境遇にある人は自己統制という厳しい美徳をもつことができる。困難・危険・傷害・不幸等は、我々が自己統制という厳しい美徳の錬成を修行することのできる唯一の教師達である

１６８　孤独でいるときには、幸運に恵まれるとあまりにも有頂天になりやすく、また悪運に見舞われるとあまりにも著しく落胆しやすい。

孤独でいるときには、我々は自分が幸運に恵まれるとあまりにも有頂天になりやすく、また自分が悪運に見舞われるとあまりにも著しく落胆しやすい傾向をもっている。第１に孤独でいるときには、我々は自分自身に関係の深い事柄に対してあまりにも強く感じすぎる傾きをもっている、第２に友人と話をすると我々の気分は一層よく静まり、第３に見知らぬ人と話をするといよいよ我々の気分はより一層よく静まる。これに関して、スミスは「われわれがほとんど同情や寛大を期待することのできないそのような見物人からこそ、われわれは最も完全な自己統制の教訓を学ぶことができるのである。」（訳書 p.330）と述べている。

１６９　逆境に陥っている人は、できるだけ早く社会の白日の下に帰らなければならない。

逆境に陥っている人は、第１に孤独の暗闇の中で独りで悲しんでいてはいけない、第２に親・友人の寛大な同情にしたがって悲しみを調節してはいけない、第３にできるだけ早く世間の日向、社会の白日の下に帰らなければならない。

１７０　順境に立っている人は、自分の価値を運でもって判断せず、性格・行為だけで判断できる人を訪問しなければならない。

順境に立っている人は、自分の幸運の悦楽を、第１に家庭の中だけ、友人仲間の間だけ、取り巻き連中の間だけに閉じ込めておいてはいけない、第２に何の関係のない人を訪問しなければならない、第３に自分の価値を運でもって判断せず、性格・行為だけで判断できる人を訪問しなければならない。

１７１　不公平な見物人が身近にいると同時に、公平無私なる見物人が遠方にいるときは、正義の法則は守られない。

寛大な不公平な見物人が身近にいると同時に、無関係な公平無私なる見物人が非常に遠方にいるときは、第１に我々の道徳情操における適正はひどく堕落する、第２に正義の法則は守られない。

１７２　判断を歪曲する原因は「公平無私なる見物人が遠方にいる」あるいは「自身の利己的な諸情感の暴威と不正」である。

我々の行為の道徳的適正に関する我々自身の判断を歪曲する原因は、「公平無私なる見物人が非常に遠方にいる」あるいは「我々自身の利己的な諸情感の暴威と不正」である。

１７３　公平無私なる見物人と同様の見方でもって観察できないので、我々の見解は非常に不公平になりやすい。

公平無私なる見物人と同様の見方でもって観察できないので、我々の見解は非常に不公平になりやすい。つまり、我々自身の諸情感の激烈さは利己的立場に呼び戻そうとし、そこではあらゆる事柄が誇張され、歪められる。

第４章　自己欺瞞の性質について、また一般原則の起源と利用について

１７４　自己欺瞞は致命的な弱点であり、人生における諸混乱の源泉である。

自己欺瞞のヴェールは自分自身の行為の欠点を見ようとする人の眼を遮っている。つまり、我々は自分自身のことを悪く考えるのは不愉快であるので、我々の眼を意識的に不利な判断を下させる事情から外すようにしている。自己欺瞞は致命的な弱点であり、人生における諸混乱の源泉である。

１７５　我々は自ら不正を固執することさえある。

我々は、自ら正しくなかったということを見きわめるのが恥かしく、恐ろしいという理由だけで、自ら不正を固執することさえある。

１７６　道徳の一般原則は経験から形作られる。

我々は、たえず他の人々を観察しているうちに、いかなることが道徳的に適正であり、いかなることが道徳的に不適正であるのかに関して、知らず知らずのうちに自ら「ある種の一般原則」（「道徳の一般原則」）を作りあげる。つまり、愛すべき動作、尊敬すべき動作、恐れるべき動作などの動作が、実際に動作を行う人の情操（愛情、尊敬心、恐怖心など）をどのように刺激するのかを観察することにより、道徳の一般原則は形成される。

１７７　「道徳の一般原則」を判断基準として、いかなる程度の褒賞または非難を与えるべきかを論議できる。

道徳の一般原則は経験から形作られるが、いったん道徳の一般原則が形成され、世間

の人々によって一致して是認されると、「道徳の一般原則」を判断基準として、我々は、複雑にして曖昧な性質をもつある種の動作に対していかなる程度の褒賞または非難を与えるべきかに関して論議できる。

第５章　道徳の一般原則の作用と権威について、またそれらの原則が神の戒律とみなされることの正しさについて

１７８　「道徳の一般原則」（正義・正直・貞節・忠義など）の尊重は義務である。
　正義・正直・貞節・忠義などの「道徳の一般原則」は生活における最重要の行動原則であり、自己の行動を支配することのできる唯一の原理である。「道徳の一般原則」を守ることが社会存立の基盤であり、「道徳の一般原則」を尊重することは義務である。

１７９　「道徳の一般原則」に対して尊重の念を有しておれば高潔な人、有していなければくだらぬ人である。
　高潔な人は自己の原則を固守し、生涯を通じて一定の同じ調子の行動を持続する。くだらぬ人は気まぐれであり、調子を変え突拍子もない行動をする。「道徳の一般原則」に対して尊重の念を有しておれば高潔な人、有していなければくだらぬ人である。「道徳の一般原則」の尊重を習慣にしていると、第１にいつも同じ程度の道徳的適正をもって行動することができる、第２にあらゆる人間を支配する不均一な気まぐれを阻止できる。

１８０　自然に湧いて出る希望・恐怖・疑惑は同情によって人々に伝播され、教育によって人々の心の中で強化される。

１８１　誠実・正義、人間愛の実行を促進させるために最も適した褒賞は人々から受ける信頼・尊敬・愛情である。
　誠実・正義が喜ぶものは富者になることではなくて信頼され、信用されることであり、人間愛の欲するものは偉くなることではなく人から愛されることである。誠実・正義、人間愛の実行を促進させるために最も適した褒賞は、我々が共に生活している人々から受ける信頼・尊敬・愛情である。

１８２　富・権力・名誉は慎重・勤勉・精励にともなって自然に与えられる。
　我々は大度・寛容・正義などの美徳が富・権力・名誉をもって報いられるのを見たい欲望に駆られるが、富・権力・名誉といった報償は慎重・勤勉・精励にともなって自然に与えられる。慎重・勤勉・精励などの性質は大度・寛容・正義などの美徳に必ずしも不可分的に結び付いているとは限らない。

１８３　詐欺・嘘言・残忍・暴力などによって利得を得ているのを見ると、憤怒の情が湧き起こる。

詐欺・嘘言・残忍・暴力などは侮蔑・嫌悪の情を掻き立てる。我々は詐欺・嘘言・残忍・暴力などの悪徳によって利得を得ているのを見ると、憤怒の情が湧き起こる。

１８４　深謀遠慮をめぐらし、準備を整えて計画に従事する人は、何らの深慮も準備もなしに計画に従事する人を圧倒する。

スミスは、勤勉・注意を喚起する上に有効な原則として、「大きな人間結合体は小さな人間結合体を圧倒する」「深謀遠慮をめぐらし、準備を整えて計画に従事する人は、何らの深慮も準備もなしに計画に従事する人を圧倒する」を挙げている。

１８５　我々の行為は「性向」と「美徳の一般原則に対する配慮」にもとづいて行われている。

我々の行為がどの程度まで性向にもとづいて行われるのかは動作をとらせる性向が快的なものであるのか、不快なものであるのかによって決定される。我々の行為がどの程度まで美徳の一般原則に対する配慮にもとづいて行われるのかは美徳の一般原則が正確であるのか、不正確であるのかによって決定される。

義務の感覚は社会的性向を促進するために用いられるよりも、社会的性向を抑制するために用いられる方が快活である。たとえば、恩恵を施した人は単に冷たい義務感にもとづいて返報を受けるとすれば不快である。たとえ激怒していても、たえず慈悲の心を忘れず、美徳の一般原則を最もやさしい、また最も好意ある態度で解釈しようとする傾向のある人の行為くらい優美なものは他にはない。

「美徳の一般原則」は慎慮、寛容、感謝、友情などの美徳が果たすべき任務が何かを決定するものである。「慎慮」「寛容」「友情」などは不正確であり、「感謝」は正確である。

１８６　瑣細な事柄に対して、吝嗇家はそれ自体に心を奪われ、節倹家は自ら設定した生活様式の結果としてのみ注意を払うにすぎない。

吝嗇家（ケチ人間）は瑣細な事柄それ自体に心を奪われ、節倹家は瑣細な事柄に対しては、自ら設定した生活様式の結果としてのみ注意を払うにすぎない。

１８７　野心は、慎慮・正義といった美徳の領域を超えなければ世間から感嘆される。

貪欲の目指す目的と野心の目指す目的は単にそれらの欲望の大きさの点で異なるにすぎない。野心と呼ばれる情感は、慎慮・正義といった美徳の領域を超えなければ世間から感嘆されるが、逸脱すれば貪欲と非難される。

１８８　自己是認の情操の伴わない行為は有徳の行為と呼ぶことはできない。

第６章　いかなる場合に義務の感覚がわれわれの行為の唯一の原理とならねばならぬか、またいかなる場合にそれが他の諸動機と一緒になって作用しなければならぬか